

サムライ・平和 第20号 立ち読み

詩人は予言者か

—— ネオ・シュルレアリスムについて

桑原啓善

初出「詩洋」第50周年記念号（1976年8月）

詩人は予言者か

——ネオ・シュルレアリスムについて

桑原啓善

目次

- 一、人類が滅亡した後、詩は存在したといえるか
- 二、アラジンの寓話
- 三、文明の原点
- 四、詩人は予言者か
 - 1 救いの二律背反
 - 2 詩の予言性と靈感性
 - 3 シュルレアリスムの功罪
 - 4 詩人の責務

一、人類が滅亡した後、詩は存在したといえるか

和気原澄生翁を訪ねたのは三年ぶりだった。私が学生時代から三十余年間私淑してきた魂の導師。昨秋出した私の第二詩集をたずさえて。翁は九十二歳にはとても思えない。瘦躯ながらハリのある色艶の顔に、炯炯と光る眼光。今でも朝夕、茶匙五杯の蕎麦粉をねって食されるだけの粗食で、だが夜中三時間にわたり、世田谷一帯を疾走される。夜中走られるのは、人々を吃驚させないためだそうだが、雨が降っても雪が降っても、それはかわらない。

まさに昭和の仙人である。知る人ぞ知る。若い時から名利の外にあって、ひたすら独自の法で心気を練られた。私のように、これといって世の主義や思想になじめない者にとつては、またとない導師であった。

私は久濶をお詫びし、詩集を差出して評を請うた。翁はフムフムとページをめくつてご覧になっていたが、「結構な出来じゃ」と云つて、本を閉じられ、私を見てニコニコと笑われた。これなら合格だ、と私が内心ほくそ笑むと、翁の目が一瞬キラリと光り「ところで君達は、人類が亡びて後、詩が存在したと、言いきれるかね」と尋ねられた。私には何

のことやら分らぬので、答えに窮していると、「いや、いま人類が滅亡の危機に瀕していることは、どう思つかね」ときかれるので、「それは、その通りです」と答えると、「だからじゃ、本当に亡びてしまった後になって、詩が過去に存在したと、詩人は自信をもって言いきれるか、ときいとするんじゃ」。これは私にとり難問である。

いつものことながら、翁の話は禅問答めいて、いっこうに要領をえぬ。だが、どうやら、翁は詩人の文明に対する責任を問うておられるようだ。そこで私は恐るおそる尋ねた。「つまり先生は、詩人と人類滅亡とのかかわりあいは何か、ときいておられるのですか。」「そのことじゃ」。翁はそう云われたきり、後は何も云われぬ。

はて、どんな責任を詩人は人類滅亡に負えばよいのか。たしかに、いま、人類は滅亡しかかっている。曰く、公害・核戦争・人間疎外・どの一つをとっても、人類滅亡は必至である。しかし、それは科学技術文明の所産ではないのか。すると、「責任を他に転嫁してはいかん」、翁の雷のような声が響く。そんなことはない、詩人だって、科学技術文明の暴走を怒り、ペンをもって烈しく抵抗しているではないか。すると、「生きるとは、責任を負うということだ」、翁の厳しい調子がつづく。

なるほど、確かにそうだ。文学だって、生死と深くかわりあうものだ。どの一つの死も他人の死であってははいけない。すると、人類の滅亡とは、どのような自分の死であるの

だ。その時、ふと私は思い至った。私が『同年の兵士達へ』の詩篇を書いたのは、彼等の死が私の死に思えたからだ。目の前に浮ぶ幼馴染みや学友の死は、まさにそういう死だった。いま彼等は「むなししい戦いで戦死した者」の名で葬り去られている。だが、そういう死で切斷された彼等の生とはいったい何であったか。それは永久にむなししい死でストップしたすべてのむなししい生である。

そういう惨酷な生の否定にわれわれは耐えられるか。私が彼等なら、おそらくそういう死を押しつけた運命や呪われた戦いへの怨念を、永久にはらすことはないであろう。だが、生き残った者はいい。どのようにでもその生をやり直すことができる。しかし本当は吾々は生をやり直しただろうか。いま公害や核や人間疎外で、うちひしがれた世界を見る時、吾々は、もっと大きな空しい死が迫っていることを予感する。でも、生きていることはよいことだ、束の間の生であっても、いろいろな気晴らしで気をまぎらせることもできる。然し、死んだあいつらにはそれすらどうしようもない。

もし彼等の死が私の死であるならば、その生を空しいものから生き返らせるすが外にあるか。その時、私ははっきり知った。それは、この戦後の世界を、価値あるものに変えることの外にすべはない、と。つまり、彼等が死んだのは、価値ある世界を創るためであつたと、事実をもつて互いに納得することのほかにないのだ。そして、それは生き残つ

た者の、生き残ったことの務めである。

戦後は未だ始まっていない。敗戦のままである。暗い荒地へいどむ者はあつても、荒地は荒地のままである。なぜ荒地から、何かが生まれえないのか。なぜ世界は変わろうとしないのか。しかし逆に世界は暗い方へばかり沈んでいく。

そんな感慨をもつて、ふと翁を見上げると、いつしか温容にかえり、私を見てニコニコしておられる。然し、目の一点の光だけは相変らず鋭い。翁は言われた。「この詩集は、戦死者の死を自己の死とうけとめている点でいくらか詩になっている。然しまだ被害者の意識だな。こういうことでは地球はつぶれてしまうよ。」

私は一瞬たじろいだ。翁は何を言おうとしておられるのか。その意図ははかりかねたが、何かえたいのしれない秘密が隠されているような気がした。「先生、被害者意識がいけないというのなら、加害者ということですか。私は何かの加害者ということですか。」「左様さな……。ま、詩人は特にそのようなものじゃ。」まさか、先生、私が戦争の加害者というほどのことでもありませんまい。それとも、そうですか。それとも何か、人類滅亡の加害者ともいうことですか。

すると、不意に翁はカラカラと笑われた。「謎がとけた。それじゃ、それじゃ」と大きな声で嬉しそうに言われた。私には何のことか分らず、狐につままれたような気持になつ

た。が、ふと翁が最初に言われた言葉が強く思い出された。「人類が滅亡した後、詩は存在したか。」ああ、このことか、このことか。翁は人類の滅亡を自分の事としてうけとつておられる。然も自分がその加害者として。そういう翁にとり、滅亡はむなししい戦いの終りに似て、それ以前のすべての生を空しいものに変えてしまうのである。滅亡はまさに空しい戦いであり、生はそこですべての空しいものとしてストップする。私には、荒涼たる人類の相貌が目には浮ぶような気がした。その時、かつて詩と称したものはいつたい何であつたか。誇らかに生を讃え、得々として生死の秘義を探るものとして、自ら高く自負してきた詩が。およそ文明というものがすべて空しいものに思えてきた。そうではないか、人間だけが創り得るものとして自負してきた文明が、その文明じしんによって人類は亡びようとしている。その時、人類のすべてがむなししい。

それまでじつと私を見ておられた翁が、こう言われた。「いま、君は文明はすべて空しいと考えたね。」「その通りです。」で、文明はただ空しいだけかね。」と、おっしゃいます。「いや、文明を加害者だと考えないかね。」ああ、その通りだ。もし、人間に文明を創ることがなければ、文明によって亡びるということもない。文明は明らかに加害者である。すると、文明の一端を担う詩も加害者である。吾々が、文明といい詩と呼んできたものは、実は文明でも詩でもない。それは反文明であり、似而非詩である。

「いま、君は人間の文明創造力を呪ったね。それは間違っている。人間が本当に断罪すべきは、自己自身だ………………。君達は人類滅亡の要因を、科学技術文明と考える、それは近代西欧で生まれたと。それはそれでよい。だが本当は、それは人類五〇〇〇年の狂気の所産じゃ。」はて、またまた翁はへんなことを云われる。人類五〇〇〇年の狂気とは何か。「狂気は狂気じゃ、人間の心狂いじゃ、五〇〇〇年間の狂い放しじゃ。」だから文明は狂い放しと云われるのか、だから人類もそのために亡びると云われるのか。

「そのことじゃ」翁は嬉しそうに膝を叩かれた。そうしてポツリと付け加えられた。「狂気は、自分が狂気とは思えんものじゃ。」翁にかかつてはかなわない。人類はどうとう狂気にされてしまった。然し、いったい、いつから、どのように、人類は狂気なのか。本当にそうだとすれば、人類は文明を根底から創り直さなければならぬ。

二、アラジンの寓話

人類の狂気について説明を求めると、翁はしばらく腕を組んで考えておられたが、やがて腕をとくと、「これは理窟では説明しにくい。かといって歴史的に説明していたのでは